

法華經呉音読に於ける輕声について

沼 本 克 明

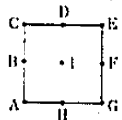
1 序

従来呉音の声調体系については、これを四声一平上去入と見て、平声輕、入声輕は無いとする考え方、漢音と同じ様に平声輕・入声輕を認めて六声体系とする考え方、が有ってまだ確定的な結論は出されていないと思われる。

中に有って、奥村三雄氏の説は注目に値する。即ち氏は「いわゆる呉音には、入声における輕重の區別一ラングとしての區別一が存せず、すべてが、重に当る音価だった。入声輕が認められるとすれば、それは、話線的関係によるパロール的な姿である」というお考えを提出され、その根拠として、(1)現在の漢語アクセントの実態、(2)九条本法華經音・読經口伝明鏡集の平声輕・入声輕の実例のみ熟語形で示される。(3)古来の声調説に平声輕・入声輕が本来無いと説くものがある。(4)色葉字類抄の仮名に加えた漢語アクセントに、呉音で輕声となるものが無い、(5)和名抄・名義抄の「俗音」に輕声を指示する記述が無い。等¹⁾をあげておられる。奥村氏の上述のお考えは、それを正面に据えて論じられたものではなく、従って尚追究を要する点が残されていると考える。筆者はここで特に法華經字音読を主対象として、上述の奥村氏のお考えを参考に、呉音の平声輕・入声輕の問題を考えてみようとするのである。その際、奥村氏が「話線の関係による」とされる意味が奈辺にあるのか、つまりどうして熟語に限ってこの声調が現われると言い得るのかを、筆者なりの立場に立って説明する事に重点を置いて考えようとするものである。

2 音義に於ける平声輕と入声輕

「九条本法華經音」の卷末部(複製本21丁表～裏)に声点図の存する事は普ねく知られている。この声点図は「法華經」を呉音読する際の声調表示の指針として書きつけられたものとする事が出来る。この声点図は下図の様にAからIまでの九個の声点が与えられ、それ



それに次の様な名称と実例が挙げられている。

A：平声之重 等是世横(声点略以下同)

B：平声之輕 一切

C：上声 阿修

D：上去兩声任意(実例無し)

E：去声 無三

(1)「国語国文」第33卷2号、「訓点語と訓点資料」第32輯、各所収論文。

F: 入声之輕 他国 奇特

G: 入声之重 石徳楽即

H: 本入声, 平声呼, 妙法 小劫 三業

I: 唐音 懷姪

この声点の中、D、H、Iは直接声調調値の区別に関与しないので、これを上図より取去ってみると、平声輕重・上声・去声・入声輕重の六種の声調を区別する体系という事になる。そうすると、この図をこのまま解すると、従来指摘されている一呉音は平上去入の四声体系である—という考え方には矛盾する事になって来る。ところが、そこに掲げられている実例を見ると注目すべき事実に気づく。即ち、平声重・上声・去声・入声重の実例は、単字で挙げられ一字ごとに当該の声点に加えられていると考えられるのに対し、平声輕・入声輕の場合には全て熟語の形で示され、その熟語の中での当該字のみに声点に加えられている、という相違である²⁾。ここから読み取り得る事は、平声輕・入声輕は法華經字音読に於いては、熟語として読まれる場合に限って現われるものではないか、という事である。言い換えるならば、呉音の単字の声調としては、平上去入の四声しかなく、ある特定の文字の組合せの場合にのみ現われるものではないか。その故にこそ一般の呉音資料には容易にこの声点を加えた例が見出されないのではないか。この様な疑いが生じて来るのである。但し、その平声輕・入声輕が、調値としての下降調、高平入破音をそれぞれ示すものであり、法華經字音読には、この音調が特定漢字の結びつきの場合にしか現われぬ、という事と直ちに考えていいものかどうかは一応疑う必要がある。呉音資料には調値そのものの表示とは無関係な機能を有する声点(毘富羅声・フ入声・唐音)が使われているのであって、或いはこの様な機能に通じるものである可能性も有るわけである。この点については順次考えて行く事にする。

さて、まず法華經字音読に於いて平声輕・入声輕が現われるのは、先の声点図の実例に挙げられていた「一切」「他国」「奇特」のみに限られるものかどうか、という問題について考えてみたい。

この点については「法華經音」自体の中に別の手掛りを得る事が出来る。同複製本23丁裏に、次の様な記載が有る。

『声違被読』

為不可 優波提 阿闍 阿刃 殊特 奇特 他国 余国 難得 夙夜』

(声点は「波」「闍」「刃」に上声堅二つ、「特」「国」「得」「夙」に入声輕、がそれぞれ加えられている。)

ここに掲出されている例の中「奇特」「他国」は、声点図付載の入声輕の実例と共通し同じく入声輕の声点に加えられている。そして更に「殊特」「難得」「夙夜」にも亦入声輕の声点に加えられているから、ここに掲げられている「殊特」以下の六例は全て同一性格のものと判断出来る。従って、入声輕が現われるのは、必ずしも声点図付載の二例に限られず、ある条件の下では広く現われるものであると考えられて来る。但し平声輕については不明。

更にもう一つ上の記述で重要なのは、その項目見出として「声違被読」とある事である。この部分の実例で、入声輕の加点されている各字が呉音の単字としていかなる声点に加えら

(2) この指摘については上記奥村論文に既に言及する所がある。

れているかを音義等で調べてみると、全て入声重である。従って、「声違被読」は「本来入声重である字が、次下に掲げる様な熟語として読まれる場合には入声軽に声調を変えて読まれる」という意味である事はほぼまちがないであろう。つまりこの記述に依って、入声軽は熟語の中で声調を変化させて読まれる場合に現われるものである事が一応の見通しとして立つのである。

この見通しを裏付けるものとして、天台宗僧能誉の撰した「読経口伝明鏡集」³⁾が挙げられる。この資料は、特に法華經を具音読する際の四声・清濁、等を中心とする口伝を集めて成り立ったものである。

この中に(14丁表～裏)次の様な記述が有る。

「二、六声者以前四声図平声与上声中間指之点有_レ之其形：□(平重と上は朱点)如此今此中間点平声字輕読之時、注、指之点也彼字、者一切、切、○字一(反符あり)是也此字外、全、法華八軸、内、平声、被読輕之字無之也一

復次去声与、入声、中間、指之点有_レ之其形□：(去と入重は朱点)如此今此入声、輕字、者隨、所由事、入声、字、読經(輕)之注指之点也所謂其字少_レ可勘出之

薄(合点・入輕)拘(上)羅(上)殊(上)特(入輕濁)如(上)優(上)曇(上濁)鉢(合点・入輕)華(上)鹿(合点・入輕)車(上)生(去)育(合点・入輕)本(上)国(合点・入輕新濁)他(上)国(合点・入輕)奇(上)特(合点・入輕)入(入重)如(上)来(上)室(合点・入輕)

隨案出大旨記之

已上六声口伝并図形如此同令出之其：□：如此」

(声点・合点・仮名全て朱筆)

この記述中、まず平声軽については、「一切」の「切」一字のみが法華經八卷の中では現われ、他には無い、と説いている。これは「法華經音」の声点図に付載された実例に「一切」とあり、しかもこの一例のみしか掲げられていなかった事と対応している。これに依って、法華經字音読に於いては、平声軽は「一切」という一語に限って現われるものであると考えてよいであろう。

次に、入声軽については次の様に説いている。

入声軽は「隨、所由、事、入、声、字、読、經」時に加える点であり、その例としては、「薄拘羅」「殊特」「如優曇鉢華」「鹿車」「生育」「本国」「他国」「奇特」「入如来室」が有る。以上の例は「隨案出大旨」を記したものである。

この実例の中には「法華經音」と共通するものが含まれており、両者の言う入声軽が同じものである事、且亦「思いだすまに大旨を記した」と有る事に依って、入声軽は如上の例にとどまらず、更に広がりを見せるものである事、が理解出来るのである。

さて、以上の様に入声軽は常に熟語の中でのみ現われて来ると考えられるのであるが、ではどの様な条件の下に現れるのであろうか。それには、先の記述中にある「隨所由事」が一つの手掛りとなる。この資料中には不入声について記述した部分に、同じ文言を用いて事象を説明している部分が他にも見出せる。参考までにその部分を引用してみると次の如くである。

(3) 山田忠雄先生御所蔵本の写真焼付に依る。

「(前略) 復次平声、与入声、中間指之点之点有之其形 □如此今此下、点、仮令、者雖為、本声、入声、字隨、所由事被讀平声響時注指之点也件字者所謂妙法、^(つ)、字、本声、入声也其故、此字、法身・法性・法華・法相等読之而又此字、仏法・王法・諸正法・等読之時、即此、音響似平声雖然正、非平声、字之故、此点、平声、旁、奇、文字、下、中間指之 (以下略)」

この記述に依ると、「妙法」の「法」は「法身」「法性」「法華」「法相」等を読む時は入声であるが、これを「仏法」「王法」「諸正法」という熟語の中で読む時は平声の響に似て来るが本当の平声ではないので、こういう場合に入声と平声の中間に指声して区別する、と言うのである。詳しい事は別に論じなければならないが、結論を言えば、「法身」「法性」等の場合は促音化して「ホッシン」「ホッシュウ」等と読まれていたものを入声と把握し、「仏法」「王法」等の場合は「ブツホフ」「ワウホフ」と開音節化して平声と同じになっていたものを平声と入声の中間に指声して区別したのである。促音化は無声子音に上接する場合のみに起る。

従って、ここの場合の「隨所由事」は、「熟語(連読される字)の上位に来るか下位に来るか、どの様な下接字を有するか」という意味で使われているのである。

そうすると入声軽についての部分の「隨所由事」と前後大巾な語義の差が有るとは考え難いので、この場合も亦同様な方向で考え得る事になる。その際注意しておかねばならないのは、フ入声の実例については声点が全く加えられていなかったのに対し、入声軽の実例には当該字を含む前後の字に全て声点が加えられている、という点である(本資料の朱筆声点が本文の内容に従って加えられている事は他例を勘案して明らかである)。ここから推定出来るのは、フ入声が前後の声調に依って起るものではない(事実、位置と下接字の清濁とにのみ関係する)のに対し、入声軽は熟語中の前後の声調的關係に依るものであろう、という事である。

そこで「明鏡集」(以下この形で略す)の入声軽の加えられている実例について検討してみると入声軽の全ての例が

- ①上声に上接する場合
- ②上声に下接する場合
- ③去声に下接する場合

に現われているのである。ここに至って、法華經字音読に於いて入声軽の出現する条件が①②③という声調關係に依るものである事が理解されて来る。

これが「法華經音」の実例についても適合するものかどうかを検討してみると、文字面の一致する「殊特」「奇特」「他国」及び「余国」「難得」は適合すると考えてよい(手続は省略するが上接字いずれも呉音声調は上声又は去声と考えられる)。しかし「夙夜」の「夜」は音義類及び字音点ではいずれも平声の声点が加えられており、呉音は平声と考えられるから、結局この一例のみは適合しない事になる。それではどうして適合しない例が含まれているのか。これには次の様な種々の疑問が生じて来る。即ち①入声軽の条件として挙げた先の①②③が全く誤っている、②入声軽の条件は「法華經音」と「明鏡集」とでは異っていた、③入声軽の条件は先の①②③のみではなく他にも有った、等である。

どう考えれば最も事実に近いのかは、以上挙げた二音義のみでは解決が不可能である。そこで次に、具体的な法華經の呉音読資料を取挙げて検討対象を広げる事にする。

尚この項の最後として問題としておきたいのは、平声軽、入声軽の現われるとする実例の

性格である。一見して明らかな如くこれ等の例は法華經字音直読という場をはずしてもそれ自身で生存し得る。いわば字音語として独立し得ていたという性格を有しているのである。この性格が、平声軽・入声軽の出現と関係するものであるかどうかは今の段階では不明であるが、一応ここで指摘しておく必要が有ろう。

3 法華經音読資料の平声軽と入声軽

本稿で取扱った法華經の字音点は次の六資料である。(以下引用の際は資料①、資料②という形で示す)

- ① 大東急記念文庫蔵巻第八(七八二巻の中)
朱声点墨仮名(鎌倉初期加点)あり。奥書無し。
- ② 同上蔵巻第八
貞治五年刊春日版。朱声点(南北朝期加点)。
- ③ 同上蔵巻第八
無刊記春日版。朱声点部分加点(南北朝期加点)
- ④ 同上蔵巻第五
無刊記春日版。朱声点墨仮名(鎌倉末期加点)。
墨声点墨仮名(南北朝期加点)。
- ⑤ 国立国会図書館蔵巻第二(八巻完存の中)
朱声点(鎌倉時代ならむ)。墨声点(朱声点の後に、朱声点と異なる場合及び朱声点の無い場合に加えてある)。墨仮名(鎌倉末～南北朝期の数筆あり)。
- ⑥ 京都国立博物館蔵守屋好藏旧蔵本巻第二
朱墨声点(巻首より四十三行目まで、南北朝期加点ならむ)。同部分に訓点も有り。

まず、平声軽について見る。

上記の六資料中、平声軽と認められるものは次の如くである。

資料②

一(入重)切(平軽)117行以下計10例

資料③

一切(平軽)418行

資料⑤

一(入重)切(平軽)102行以下計20例

資料①には「一切」の字面は存するが全て平重の声点に加えられている。資料④⑥には「一切」の字面が現れない。

以上の如く平声軽と認められるものは「一切」の「切」のみである。

この他参考までに掲げれば、宛木正亨氏「法華版經の研究」巻末付載の写真で見ると、「唐招提寺蔵弘睿版巻第八(図版四)」「京都大学図書館蔵巻第八(図版一七)」の二点の「一切」に平声軽が加えられている様である。

さすれば、実際の加点資料に於ても「一切」にのみしか平声軽は加えられておらず、音義の内容に正しく対応する事になる。

これに依って、法華經の音読に於いては、平声軽は「一切」一語に限って現われるものと

考えられるのである。但し資料①の如き実態から判断すれば、平声軽は必ずしも常にそう読まれねばならなかったという性格のものではなく、平声重(単字としての呉音声調)のままて読まれて一向に差しつかえ無いものであったと考え得るであろう。これを調値の側から言えば、本来低平入破音プラス低平調である「一切」が法華經の音読の場合には低平入破音プラス下降調としても実現し得た、という事になるであろう。残念ながら、それでは何故この熟語に限ってその様に発音されたのかという事、については詳らかにし難いのである。

次に入声軽に移る。前記六資料中入声軽と判断出来るのは次の諸例である。

資料①(平重・入重は以下平・入で示す)

百由旬(入輕上上濁)(174), 法師(入輕上)(182・188・194・207), 脱諸難(入輕濁上平)(253), 出家(入輕上)(253・254・259), 法華經(入輕上上)(261・328・330・351・390・284・296・326・345・368・400), 皆悉(上入輕)(261), 法華(入輕上)(261・343), 法鼓(入輕平)(402), 及諸(入輕上)(417)

資料②(墨点に依る, 朱筆は朱と示す)

衆徳本(去入輕平)(301), 国遙(入輕去)(314), 諸徳本(上入輕平)(320),

資料⑤

説諸法(入輕上フ入)(98), 及諸(入輕上)(268・475・585), 僮僕(去濁入輕濁)(118・418・430・514), 鹿車(入輕上)(276), 出於火宅(入輕上平入)(205), 説三(入輕上)(230・594), 悪鬼(入輕上)(241・267), 説衆(入輕上)(267), 生育(去入輕), 実法(入輕フ入)(319), 説於苦諦(入輕上平平)(321), 其夷(朱上入輕), 阿鞞跋致(平平濁入輕上)(333), 竊盜(入輕上)(365), 他国(上入輕)(414・419), 賈客(買に平と上, 入輕)(420), 特尊(入輕濁上)(432), 忽於此間(入輕上平去)(482), 此夷我子(平入輕平平)(483), 我夷其父(平濁入輕濁上濁平濁)(483), 夙夜(入輕平)(519),

六資料中入声軽と判断出来るのは上記の通りで、資料③④⑥には一例も見出し得ない。これは、いずれも部分加点である事にも一因が有るかと思われる。但し資料②は全巻加点であるが、入声軽は上記の僅か3例にとどまる。3例しか見出せないという事は、果してこの資料では、それが入声軽として加点されたものかどうか、に一応疑いを残しておく必要がある。

以下資料①と⑤に依って検討を加えて行く事にする。

上に取り挙げた実例の中には、必ずしも熟語とは限らないものを含んでいる。例えば「脱諸難」「説諸法」「出於火宅」の如きものである。今これ等も全て含めて、入声軽の加点されている字の上接字或いは下接字の声調とその出現数を調べてみると次の様になる(この際「法華經」の「經」字は、「法」が入声軽になるならないの条件としては作用しないと判断出来るので、「法華」に纏めて処理し、これを便宜1語と考える)。

この統計表に依って明らかな様に、上接字は例外1を除いて、上声又は去声である。この点は音義に掲げられてあった実例と共通する。例外となるのは資料⑤の「賈客」であるが、これは、平声と同時に上声にも声点が加えられているので、この上声を取り挙げるならば、例外ではない。又下接字の場合について見ると、殆ど上声であって、この点も音義とよく通じる所である。例外となるのは、下接字が平声の「法鼓」(資料①)「夙夜」(資料⑤)と入声の「実法」(資料⑤)の三例のみである(加えて「此夷我子」(資料⑤)は上接下接両字とも平声なのでいずれにしても例外となる)。この中「夙夜」は音義の実例としても入声軽が加えられるものとして挙がっていた。従って出現例そのものとしては両者に共通するもの

資料①

	平	上	去	入	計
上接字			1 (1)		1 (1)
下接字	1 (1)	6 (23)			7 (24)
計	1 (1)	6 (23)	1 (1)		8 (24)

(フ入声は入声に勘定する。()内は延語数。)

資料⑤

	平	上	去	入	計
上接字	1 (1)	3 (4)	2 (5)		6 (10)
下接字	1 (1)	12 (17)		1 (1)	14 (19)
計	2 (2)	15 (21)	2 (5)	1 (1)	20 (29)

(「此実我子」「我実其父」の二例は音読上の句切方が不明なので算定に加えていない)

資料①+⑤

	平	上	去	入	計
上接字	1 (1)	3 (4)	3 (6)		7 (11)
下接字	2 (2)	18 (40)		1 (1)	21 (43)
計	3 (3)	21 (44)	3 (6)	1 (1)	28 (64)

せは、そのまま字音点に於いても適合する。即ち、入声軽は、上接字が上声又は去声、下接字が上声、の場合に本来の入声重が変化して現われる。

第2は、特定の組合せの場合には、上の条件に合致しない場合にも入声軽は出現するが、これ等を全て含めて説明し得る様な別の条件を見出す事は出来そうにないから、文字通り例外と考える他ない。そしてこの例外は後述する様にそれなりの出現の理由が有ると考えられる。ちなみに述べておけば「法華経音」及び資料⑤で入声軽の加えられている「夙夜」は、前田本色葉字類抄に於いても「夙夜(入軽平) ツクヤ」(シ部)と、公卿部の語彙として同例が見出される。或いは漢語声調として古く固定したものをそのまま法華経字音読に受け入れたものかも知れない。

第3に、上の様な声調変化に依る入声軽の出現はその条件を満たせば必ず起るものではなかった、という事である。例えば、「殊特」「難得」の様な語は、実際の加点資料ではいずれ

である。

さて、以上取り挙げた入声軽の加えられている字につき、各資料中の他の例を拾い出してその声点がどうなっているかを調べてみると、全て入声重又はフ入声の位置に加えられている事が解る。例えば資料①の「百」字について見れば、

百千万(入重去平)(10)、百千兩(入重去平)(82)、八百万(入重入重平)(130)等、

の如くである。資料⑤の「竊」字では、竊作是念(入重平平濁平)(433)の如くである。そしてこれ等の例の上接字は入声か平声、下接字は上声以外の声点が増えられており、丁度入声軽が現われる声調環境と逆になっているのである。以下他の字の場合も同様なので例は省略する。

従って、入声軽は、本来入声重の声調を持つ字が、上接字に上声か去声、下接字に上声、が来た場合に声調を変えて現われるものであると考えられる。この事は音義に依って導き出した所と一致するのである。

以上、字音読資料中の実例の検討に依って次の様な事が言えるであろう。

第1は、音義の掲出例に依って導き出された入声軽出現の為の声調の組合

も入声重が加点されており(資料①275行目, ⑤139行目等), 「法華経音」や「明鏡集」と異なるのである。又その他にも入声重の字が上声去声に下接或は上声に上接する場合は字音直読上類出するのであるけれども必ずしも入声軽が加えられていないのである。

第4は, 字音点中の入声軽の現われる場合は, 必ずしも字音語として抜き出し得るものとは限らない, という点である。前項の末尾に述べた様に, 音義に指摘している例は「字音語」として考え得るものであった。しかるに字音点中では「及諸…」「出於火宅」「説三…」等々, 必ずしも字音語として独立し得るものではないものが含まれている。これは結局字音直読の際に, 連読されるならば, どんな場合にも現われ得る事を示していると考えべきものである。

4 平声軽・入声軽出現の原因

さて, 以上の検討に依って, 法華経呉音読に於いては, 平声軽・入声軽は本来存在せず一換言すれば, 単字の声調として平声軽・入声軽は存在せず一連読上の声調変化に依って生じたものである事が解る。この事は, 「法華経音」を初めとする単字掲出型の音義に, 平声軽・入声軽の確例が見出し得ない事に依って, ほぼ誤り無いものと考え得るであろう。

それでは, どうして上の様に連読上に限って, 平声軽・入声軽が出現するのであろうか。ここでその出現の理由について検討しておきたい。

まず平声軽の「一切」であるが, この語は本来の呉音の声調で読むと, 入声重+平声重と考えられるから「○△○○」(高い音節を●, 低い音節を○で示す。△は入声音。尚各声調の音価については既に定説化していると考えるので云為しない。)の様に低平型に読まれる事になる。ところが, 法華経音読上では「切」が平声軽に読まれるという。この平声軽の示す所は下降調の調値と考える他はなさそうであるから「○△●○」という中高型になって現われる事になると考えられる。但, どうしてこの語に限りこういう型で読まれねばならなかったのかの説明は今の所不可能である。

次に入声軽について考える。

入声軽の示す所も, その調値が高平調入破音(入声重の低平調入破音に対して)であるという調値の指示と考える他なさそうであるから, 入声軽の出現に関する変化は, 結局次の3つの型に集約出来る。

① 上声+入声重→上声+入声軽

●+○△→●●▲

② 去声+入声重→去声+入声軽

○●+○△→○●●▲

③ 入声重+上声→入声軽+上声

○△+●→●▲●

(呉音の上声は1音節, 去声は2音節と相補的な関係を認めて処理する)⁴⁾

この様な変化が何故起ったのか。

本稿の初めに引用した「法華経音」の声点図の中に, 後世毘富羅声と呼ばれる声点に加え

(4) 奥村三雄「音節とアクセント—呉音声調の國語化—」(「国語国文」第22巻11号)等。

られているが、この毘富羅聲が、吳音読に於ける声調訛化を示すものである事についてはかつて論じた事が有る⁵⁾。その声調変化を結論だけ示せば次の如くである。

上声+去声→上声+上声

●+○●→●●●●

去声+去声→去声+上声

○●+○●→○●●●

この変化の型は、先の入声輕出現の変化と全く同様である。従って、その変化の原因も亦両者に共通すると考えられそうである。「上声+去声」又は「去声+去声」の組み合わせによって起る中低型のアクセントは、平安時代の日本語に於いては極めて不安定な型であったと思われる。ここから、毘富羅聲の示す声調変化は、当時の日本語のアクセントの型として不安定なものを避ける為に起った一言わば字音声調の國語化—と考えるのである。従って、入声輕の出現も亦「語として安定する声調を求める為」であるとする事が出来るであろう。

但し両者の間に有る大きな相違は、変化前に現われる声調の型の、当時の日本語中に於ける有無である。入声輕に変化する前の声調の組合せ、即ち上声+入声輕・去声+入声輕・入声輕+上声の示す声調の型は、必ずしも日本語の型として存在しなかったものではない。従って、入声輕の出現を、変化前の型を避ける為、という事だけに求める事は出来にくいであろう。変化後の型が、毘富羅聲の示す声調変化と全く一致する所から判断するならば、むしろ、変化後の型—高平調・低起調—が字音直読上安定していた為に、その様な型を求める為に変化させたと考えるのが妥当であろうと思う。

更に、変化前の型が、当時の日本語の声調の型として、存在しなかった、した、というこの相違は、毘富羅聲が規則的に加点されねばならなかったのに対し、入声輕は必ずしも加点しなくてもよい（必ずしも変化させて読まなくてもよい、事実既に述べた如く入声輕は条件を満たしていても加点されていないものが多いのである）という、現象の相違として現われていると考えるべきである。

5 法華經音読以外の吳音の平声輕と入声輕

この項では、先に検討して来た法華經字音読の場合での現象がどのような広がりを見せるものかについて余論として、検討を加えてみたい。

それに先立ち、まず図書館本・観智院本類聚名義抄の吳音と和音とについて検討し、単字としての吳音声調に平声輕・入声輕が存在しないものであったという考え方が、広く受け入れ得るものかどうかを明確にしておきたい。和音は法華經等の音読に用いられた字音（これを本稿では吳音の典型と見る）とほぼ重なり、所謂漢音と対峙するものとする。

さて吳音に於ける平声輕・入声輕が本来単字の声調としては存在せず連読上の声調変化を反映するものであるという事が広く認められるとするならば、この名義抄の如く、単字として掲げられている場合には、この声調が見出せないはずである（但し、可能性としては、不用意に漢音を掲げたり、或いは、名義抄の出典の段階に於ける字音語の声調を機械的に単字に分割して取挙げたりする事が有り得るであろうから、こういう場合の配慮は必要である

(5) 拙稿「毘富羅聲の機能」(「国語学」84集)。

う)。

漢字に加えられた声点と仮名に加えられた声点との対応は、当然の如く次の様になる。
(但し一字表記の字音については手掛りとならないので省略する。)

(漢字) (仮名)

- ① 平声重——平平 (三字表記では「平平平」)
- ② 平声軽——上平 (// 「上上平」)
- ③ 上声——上上 (// 「上上上」)
- ④ 去声——平上 (// 「平平上」)
- ⑤ 入声軽——上上 (// 「上上上」)
- ⑥ 入声重——平平 (// 「平平平」)

名義抄の仮名に加えられた声点が上のどの型で加えられているかを調べてみると次の様になっている(部分加点のものは全て捨てる)。

○図書寮本名義抄

(呉音)

例なし。

(和音) (「真云」「禾」を合わす)

- ① 平平—29例 ② 上平—1例 ③ 上上—5例
- ④ 平上—27例 ⑤ 上上—1例 ⑥ 平平—7例

○観智院本名義抄

(呉音)

- ① 平平—4例 ② 平上—3例 ③ 平平—1例

(和音)

- ① 平平—129例 ② 上平—5例 ③ 上上—7例
- ④ 平上—105例 ⑤ 上上—1例 ⑥ 平平—25例

その他、去上—1例、平上(入声)—2例が有る。

上の様に、図書寮本・観智院本共に①②③④の平重・上・去・入重で殆ど全てを占める。⑤の上声に例が少ないのは、言うまでもなく呉音系字音には二音節で上声になるものが無いからである。従って、まずその出現上から、平声軽・入声軽がそれぞれ一つの独立した調類を構成するものであったとは考え難い事になる。然しながら上に見る様に、僅かながら、平声軽・入声軽となるものが見出されるのである。その例は次の如くである。

図書寮本和音

- ② 平声軽—上平の例：洲^{スウ} (55頁)
- ⑤ 入声軽—上上の例：緑^{キョク} (291頁)

観智院本和音

- ② 平声軽—上平の例：亘^{コウ} (94頁)、暖^{ナム} (207頁)、州^{シウ} (1002頁)、矜^{コウ} (1092頁)、舒^{シウ} (1302頁)。
- ⑤ 入声軽—上上の例：薏^{キチ} (禾無し) (93頁)。

以上の例の中、声点に疑問のあるのは「暖^{ナム}」の「ム」の声点である。この字の平・上の声点は字形上区別が難しい。名義抄の和訓の声点の中にもこの字の平・上には揺れのあるものが見出される。従ってこの例は移点の誤りと見る事が出来る。「洲^{シウ}」「州^{シウ}」の二例

は、仮名表記の形（吳音ではス又はシュとなるはず）及び声点を同時に勘案すると漢音と考えられる。尚「州ツウ」には「一」の形の声点が「上上」と加えられており、これは改めて吳音声調を加え直したものと考えられる。「矜コウ」の「ウ」には平声と上声の二つの声点が加えられている。この例も「州」と同じく漢音で平声輕となるから、吳音と漢音との声調を併記したものと判断出来る。「和音」の注記の無い「斡サテ」は、没韻所屬字であって、吳音・漢音共に「キテ」の音は不審である。この様に平声輕・入声輕となる例は問題となるものが多い。

特に観智院本には誤写や誤点の多い事が指摘されている「和音」の声点にも先に指摘した様に「去上」「平上(入声)」の様に、理論的に考え難いものも現れている。これは、この程度の確率で全体に誤点が含まれている事をうかがわせるものとして受け取れる。

以上の如く、名義抄の吳音・和音には、単字としての平声輕・入声輕の声調は存在しなかった、その様に思われるものは漢音が混入したものと考えるのが妥当である。この事は、引いては吳音一般に平声輕・入声輕が存在しなかった事の一証とする事が出来る事実であろう。

さて、以上の事を参考にして、他の吳音読資料を一瞥する。

◎正樂寺藏如来遺跡講式（建保三年、本奥書）鎌倉末期加點か。全巻の字音語に声点あり。

（平声輕）

一切（入重平輕・この平輕或いは上声に加えたものとも見得る）（129行）

（入声輕）

遺跡（去入輕）（18行以下計13例）、真跡（去入輕）（74）、殊特（上入輕濁）、樹葉（平重濁入輕）（61）、辺族（去入輕濁）（68）、竜窟（去入輕）（80）、黒師子（入輕上平重）（149・158）、峻壁（平重入輕）（165）、経歴（去入輕）（177）。

本資料の字音読には、漢音も交用していると判断出来る。上の挙例中には、声調・清濁の点から漢音と判断出来る例（風儀（平輕平重濁）、風霜（平輕平重）、炳然（平輕平重濁）、尸毗（平輕平重濁）、靈徳（平重八輕）、薺株（入輕平重）、不日（上入輕濁）、紙墨（上入輕濁）等⁶⁾）は挙げない。

まず平声輕について見ると、吳音読では「一切」のみと思われる。この声点は或いは上声とも見得る。さすれば平声輕から更に上声に移行した事になろうか。

入声輕について見ると、上接字が上声の例—1語、去声の例—5語（17例）、平声の例—2語、下接字が上声の例—1語、となっている。従って入聲の加えられている合計9例の中、法華經字音読に依って導き出された結論に違うものは、上接字が平声である2例である。この2例をどの様に判断するか。即ち例外の範囲にとどまるものと見るか、或いは法華經字音読の場合とは別の考え方で把握すべきものであるのか。問題の残る所であるが、筆者は例外の範囲にとどまるものと見たい。本資料に1字1漢語の例には入声輕の加點されている例が全く見出されない事は上の見方の妥当なる事の一つの傍証となるのではあるまいか。ちなみに記しておけば、例外となる上の2例の「葉」「壁」は、漢音でも入声輕となるはずであるから、その混入という可能性も有り得るはずである。

◎東大國語研究室藏大般若經卷第一（建長六年校本）

(6) 1字音語は同一体系の字音で統一して読まれているという判断に立っている。

(平声輕)

南瞻部洲 (去○上濁入輕) (222)

東勝身洲 (○平○平輕) (223)

北俱盧洲 (入○上平輕) (223)

(入声輕)

胸臆德字 (墨平墨入入輕平濁) (151)

上の様に、平声輕の例は図書寮本名義抄と一致する。ここにも「シウ」と漢音の形が示されている。入声輕の例は「德」1字であり、「殊特 (○入重濁)」(202)という、法華經で輕声になる例も、入声重が加えられている。如来講式の「靈德」で指摘した様に「德」は漢音入声輕であって、法華經字音読の際の法則が当てはまらない所から考えると、漢音の混入と考えるべきかも知れない。

ところで、この様に呉音読誦音中に漢音を混用する事が果して有り得るのかどうか。この点については、次の様な例証が可能である。

先引の「読経口伝明鏡集」に次の様な記述が有る。(傍訓・返点を省略する)

「(前略) (九声図を掲げて) 今此中心点者世間希有事也云云 古老相伝云此 九声図輒不可披露 尤為殊勝々々又賀州明覚三藏云於此九声点図一段者最極秘事也努々無及外見云云 又播州書写性空上人云法華經中法 (中心に朱点) 中被読之所必法 (中心に朱点) 字中心可指 声也其故多分是法中半音突舌読之僻事也努々於法中者不可引合処也云云 又云高雄高弁上人云此九声者世間未流布仍人不知之適知人希事也然則此一段尤殊特也云云 抑今此中心点字者何等字耶 答日彼字者様々説有之而且付一説云之假令吳音字随所由事漢 音読之時注指之点也所謂伴字者分 (平濁声点) 一字是也 問日何必出分 (平濁) 字耶 答此 字一分 (平濁) 読之時則吳音也本濁也又平声也然而此字又分身分明分別等読之時此声漢音也 仍此注指之点也是則先哲口伝也云云 (略)」

この記述に依って知られる様に、文字の中心に加えられる点については諸説が有った訳であるが、中に呉音読中「随所由事」で漢音で読まれる場合に加点するという説が口伝の一つとして存在していた。実例としては「分」一字がそうであると言う。この字を実際の法華經呉音読資料について調べてみると「分別」の場合は去声に加点され、その他の場合には平声濁点に加えられており、先の記述の通りである⁷⁾。この中心の点は管見の範囲では今まで字音点資料中に加点されたものを見ないから、多くの場合この様な特別の徴表は示さないのが普通であったと思われる。それ故にこそ諸説が生じたとも言えよう。

かくして、呉音読誦中に漢音を混読した場合も有り得た事を知る事が出来る。それが必ずしも「分」一字に限らない事は、「法華經音」の声点図に、「唐音」として中心の点を与え「懷妊」の実例が挙っている事によって推定出来る。これも「明鏡集」の記述を参照すれば「クワイニン」と「懷」を漢音に読む事を指示したものと判断出来る。「唐音」という名称はその意味と考えれば無理が無いわけである。

さてそうすれば、法華經呉音読に現われる平声輕・入声輕は、声調変化などによるものではなく、全て漢音の混入したものではないかという疑問が生じて来る。しかしこれは考えに

(7) 法華經音義の中に屢々「一字兩音字」として二音のある字を掲げてあるが、この類の中には、必ずしも意味の相違と対応する事実上の一字兩音字ばかりではなく、漢音を含んでいる場合の有る可能性が有り、尚よく検討すべき所である。(1973-9-15)

くいであろう。何とならば「切」は漢音去声であるし、入声輕の加点されるものの中に「特」「脱」「僕」「実」の様に漢音でも入声輕にはならないものをもかなり含んでいるからである。尚声調変化という観点から説明出来ない例外「夙夜」は漢音の混入として説明し得るのではないかと考える。

以上少々法華經以外の呉音読資料について見て来たが、残念ながら、この他に検討し得る資料を持あわせていないので、広がりについて明確な見通しを立てる事が出来ず、将来にゆだねねばならない。

以上による本稿の結論は次の如くである。

- 「呉音」に於いては平声輕・入声輕は、単字の声調としては一切存在せず、特定の字音語の声調として現われ、特に入声輕の場合には上接字又は下接字の声調の影響による一種の声調変化の結果現われるものである。
- 「呉音資料」（呉音を基調とした読誦資料）に於いては、平声輕・入声輕は声調変化と漢音の混入という全く異なる二元的な観点で検討する必要がある。

この結論の中、前項については、奥村三雄氏の見通しと全く一致するものであり、筆者も亦氏の見解を是とするものなのである。